



市島春城隨筆集

全11卷

◆クレス出版◆

刊行にあたって

早稲田大学図書館

藤原 秀之

春城市島謙吉(安政七―昭和一九年)は、『記録魔』であった。今日残る彼の日誌は、明治一八年(二六歳)から昭和一四年(八〇歳)まで、途中若干ぬけている部分があるが、ほとんど毎日の公私にわたる身の出来事を丁寧(ていねい)に記している。その量たるや、一冊八〇丁前後の和綴の冊子に、一〇〇冊以上にのぼる。彼は他にも、自らの関わった出来事を、いわば部類記のようにまとめた記録類や、日々の雑感をつづった筆記類を数多く残している。にもかかわらず、今日、彼の業績を知る人は、決して多いとはいえない。

幕末、越後の豪農の一族に生まれた市島は、一六歳で上京、開成学校(のちの東京大学)の門をくぐる。同期には高田早苗、坪内逍遙、山田一郎ら、のちにも早稲田大学を支える人々がいた。

そして、高田を通じて知った小野梓、さらには大隈重信との出会いが彼の人生を決定することになる。

若いころの彼は、ジャーナリストであり、政治家であった。大隈のもと、立憲改進黨の結党に参加、讀賣新聞や新潟新聞の主筆としても活躍し、明治二七年には衆議院議員に当選する。

四〇歳代に入り、病気のため政界を引退すると今度は一転して早稲田大学の経営、とりわけ図書館の運営に力を発揮する。

明治一五年、大隈重信の庇護の下に開校した東京専門学校は早稲田大学へと改称、高田早苗を中心として新たな発展期を迎えようとしていた。かつてその開校に携わり、講師、幹事などを勤めた経験のある市島は、図書館長として復帰し、その後大正六年に館長を辞めるまで、理事などの職務を兼ねながら学苑経営に手腕をふるったのである。

彼の残した記録は、その間の事情を当事者の立場から詳細に綴ったもので、それは一個人の日誌というより、近代日本における政党政治の歴史であり、大学、あるいは図書館といった教育機関の成立の歴史でもあって実に興味深い。

晩年になると、彼はそれまで書きためた筆記類をもとに次々に随筆集を刊行する。その内容は前述のような彼と早稲田、あるいは大隈に関わるものに加え、自らの趣味である古書、書翰蒐集、印章に関する話、さらには内外の著名人の逸話など広範なものとなっている。

今回、その中の一〇余点が復刻されたこととなった。従来あまり注目されなかった人物、文献であるだけに、読み物としての面白さもさることながら、幅広い分野の研究に資するところが大きいのではないだろうか。政治家、図書館人、そして文人と、様々な顔を持った市島春城が再評価される機会となれば幸いである。

市島春城略年譜

一八六〇(安政 七)年

二月一七日、越後国(新潟県)北蒲原郡下条村に生まれる。父・直太郎(通称・次郎吉、号節齋)、母・シゲの長男。

幼名・雄之助、のち、謙吉。

水原の広業館に寄宿し、星野恒に学ぶ。

一八七〇(明治 三)年

新潟英学校に入学。

一八七二(明治 五)年

上京し東京英語学校に入学。

一八七五(明治 八)年

開成学校(翌年東京大学となる)に入学。同期には、のちにも早稲田大学を支える、高田早苗、坪内逍遙、山田一郎らがいる。

一八七六(明治 九)年

高田早苗とおして小野梓の鷗渡会に参加、さらには大隈重信と相識する。

一八八一(明治一四)年

明治一四年の政変により大隈重信が下野したのちもなつて東京大学を退学。

一八八二(明治一五)年

和泉佳一の八女・ユキと結婚。

一八八三(明治一六)年

四月、立憲改進黨結成に参加。

一八八四(明治一七)年

『内外政事情』発刊。

一八八四(明治一七)年

一月二一日、東京専門学校(のちの早稲田大学)開校。

一八八四(明治一七)年

新潟県中頸城郡高田におもむき、高田新聞を発刊、社長兼主筆として立憲改進黨系(のちの立憲改進黨)の論陣をはるが、批判記事が新聞条例に触れ、投獄される。

一八八四(明治一七)年

無罪釈放。上京し東京専門学校講師となる。

一八八四(明治一七)年

第一回総選挙に新潟二区より出馬、次点で敗れる。

一八八四(明治一七)年

九月、第四回総選挙に出馬し当選、以後八年間の議員生活に入る。

一八八四(明治一七)年

東京専門学校が社団法人となる。学監・高田早苗、会計監査・市島謙吉。

一八八八(明治二一)年

八月、新潟の客舎で咯血、医師から静養をすすめられ、政治活動から退くことを決意する。

一九〇一(明治三四)年

一月、東京専門学校は早稲田大学と改称、あわせて図書館が落成し、その初代館長となる。

一九〇二(明治三五)年

国書刊行会創設(総裁・大隈重信)。

一九〇五(明治三八)年

文庫協会(翌年、日本図書館協会)会長となる。

一九〇七(明治四〇)年

大日本文明協会創設(会長・大隈重信)。

一九〇八(明治四一)年

このころ、早稲田大学第二次拡張計画にもなう基金募集のために奔走する。

一九一五(明治四四)年

早稲田大学理事に就任、新校規をつくる。

第二次大隈重信内閣のもとの総選挙に、大隈の後援会長として選挙戦を戦う。議員を辞して以来の政治活動に、図書館長以外のすべての職をおりて臨む。選挙後の組閣で高田早苗が文相となったことにともない、早稲田大学は高田早苗名誉学長、坪内逍遙名誉教授、市島謙吉名誉理事とする。

早稲田大学理事に就任、新校規をつくる。

早稲田大学理事に就任、新校規をつくる。

早稲田大学理事に就任、新校規をつくる。

早稲田大学理事に就任、新校規をつくる。

早稲田大学理事に就任、新校規をつくる。

早稲田大学理事に就任、新校規をつくる。

早稲田大学理事に就任、新校規をつくる。

早稲田大学理事に就任、新校規をつくる。

早稲田大学理事に就任、新校規をつくる。

市島春城随筆集 全11巻構成

第1巻

随筆頼山陽

山陽の生活

小影/小影自題/父子の至情/広島の居と山陽の鑑室/苦

勞人の山陽/父子再会/帰郷を避ける辞柄/春水遺稿出版

の事/大患不起の消息/臨終と未亡人の書簡/雲華の弔文

/山陽の墓誌/未亡人に就て/三樹三郎に就て/山陽の貧富

山陽の文芸

日本外史/文/詩/書簡/書/画

山陽の趣味

総説/書画癖/骨董趣味/篆刻/煎茶/平曲/酒暦

山陽と諸家

茶山/有栖川宮家/日野資愛/大槻平泉/古賀殺堂/亀井

昭陽/大塩中齋/猪飼敬所/細川林谷/巻菱湖/宮原節

庵/江馬細香/木村黙老/滝沢馬琴/山内容堂/蘇東坡/袁

隨園

山陽の雑事

細心の山陽/シマリ屋の山陽/山陽最後の望を達せず/梅

溪游記/西野梅溪の遺詩/山陽揮毫の詩笠/雪舟の碑文を

書す/博多を去る時の詩/山陽一本やらの/二儒の山陽

観/叢書の序/鴨河の記/春日杯の記/山陽と巖島/山陽

と島原/山陽と演劇/玉蘊女史/東山の俗謡/山陽の和

歌/姉妹巻の奇遇/大隈家の三墨跡/秦滄浪に対する冷

語/十五両の借り参らせ/頼家の猫/梅颯の書簡

山陽の遺跡を訪ふ

京都の頼家を訪ふ/山紫水明処を訪ふ/備中の小野氏を訪

ふ/耶馬溪探勝

追 録

耶馬溪並に雲華の妾に関する書簡/母堂に寄せた書簡二

通/山陽と四糸派/山陽印癖の追補

補 遺

山陽竹田対坐の図に就て/遺愛品陳列の図に就て/枕を雲

華に贈る/腥史と精進/校書袖突に書き与へた詩書/外史

の材料を寄与した人/南遊巻/西省帖/旅中に得た山陽と

鴨庄の逸事/三樹が平野に寄せた書簡/酒ならば千里も厭

ひ申さず/雑事

(大正14年、早稲田大学出版部)

(大正14年、早稲田大学出版部)

(大正14年、早稲田大学出版部)

春城閑話

寺は趣味の淵藪／茶人の趣味教育／反故趣味／自然を愛する国民／紙／包装と裂地／玩香／天平時代の紙の品目／石を語る／虫と詩／雨の詩趣／修善寺の鐘声／桜／松の風趣／錦絵の彫刻と刷師／版木芸術の行末／木版と其材料／東西芸術の相異／塔／帝王文学の偉観／民衆芸術／含蓄の趣味／連想の趣味／草双紙／光琳研究／白雲金洞探検の記／白帝城と木曾川の奇勝／十和田湖と溪流美／光悦の遺蹟を訪ふ／図書趣味一斑／古書あさり／図書館生活／豆本蒐集談／書簡趣味／書簡蒐集から得た三十則／日誌の趣味／百筆の蒐集／印の趣味／藏書印小話／書齋六面観／田園の趣味／僧房生活／露地生活／外人に日本の女性を語る／農村随筆／逍遙翁に聴く案山子／漫談手拭と火燧／美術として見た女帝／扇／日本料理（昭和11年、健文社）

鯨肝録

丙子雜俎 富獄禮讃／可否茶館／銅脈／みさご／退筆の利用／紅白の鞠／雅邦の逸事／ダッチ・ワイフ／集古十種の隠れた編纂者／行誠上人／醉人松延源八／スケッチの狂歌／芸術家の放屁／画家の鍊金術／木堂の諧謔／節分の歎／江戸児の任侠／田中正平博士の料理／石川博士と猿／選挙三要／未来の鳥魚戦／鄙俗の芸術／可笑味／不合理の詩材／紅霞／線美／俳人の洋行／風月の領有権／修験祭／喜怒を鐘に托す／柳北翁の碑に対して／良妻／川柳の碑／日誌／画幅の恰好／園丁／慢心／和歌漫歩／学名／銀座画廊／三囲の川柳／葉がくれ／両雄趣味の遭遇／馬琴の秘話／濫読の弊／森立之の事／頼山陽の微時／一画家を失ふ／此一戦／森林愛護／外人に北海道漫遊を勧む／日本の庭園を語る／松霞安田翁の深秀園／四時循環の天恵／日光徳川氏廟の外人観／福内鬼外 読書余録 出版の今昔／書物の敵／反訳難附雑話／小野梓全集序／紅葉山人の日誌／里見八犬伝に就ての追憶／三馬の浮世風情を読んで／雲萍雜誌に就て／外国の図書蒐集家／読書の処則／書齋（移動書齋）／貼り込み帖／謎の良寛／相馬御風の随筆集について其他／『目明きの垣覗き』を読む／みさご題号の由来 回顧録 搖籃時代の議會回顧／選挙の回顧／青春時代の回顧／長岡の回顧／奇遇／郷土自慢／初度の旅／旅の今昔／雪の想ひ出／逍遙博士の業績／後藤新平伯

聖夢と国難／西園寺公の事／頼山陽の時事実／驚婚／恋愛結婚是非／軍費／鬼門／琴台と高田の雪／原宏平と蓮月尼／親不知の三家村／浮世絵大家は多く田舎出身／新渡戸博士と唐人お吉／世界的好色本／浴場の女／鰻の串／おいらん芋／雪中の履物／墮胎專業者／署名狂（昭和11年、東苑書房）

余生児戯

ス・フ随筆 虎／隣人／敗荷残柳／人を酒の下物として／望郷／田園の山水美／市塵／不滅の火／八百圓／梅干と饅頭／銀座の横町／梅／日は好日／話術落語について／酒類童子／メスメリズムと宗教／豆腐札讀／組上芸術／させるの趣味／獄中の喫煙／ビール決闘／西洋の娯楽／食と生田万／緑蔭閑話／下駄／也有と熱海／田園山水／一葉女史許嫁の人／酒は大義の母／石上流に進むの説／青丹よし／川柳／昨今の川柳／伊勢屋／雜誌漫歩／偶感雜録 旅と紀行 文人の旅／水郷遊記／越後新井郷川／モールの「ジャパン・デー・バイ・デー」／昔の旅／私の初めて見た東京／血気時代の富士登山／支那の新しい日本史蹟を訪へ／旅行と科学人 近衛霞山公追憶／大隈侯の寿齢の考察／軍人後援会長たりし大隈侯／青淵浪沢子爵に就いて／交通文化の恩人前島勇爵／田中青山翁／小野梓氏の逸事／大石正巳氏と余／豊城星野恒先生／高田早苗博士を悼む／林若樹君／安田善次郎君を悼む／石渡敏一氏／谷村一太郎君の一周忌に際して／画家野沢如洋／沢本与一君を憶ふ／亡友二人を憶ふ／豪快児長田秋濤／外人スネルの事 文芸 教育機関としての私塾／昔の大衆教育を憶ふ／鉄の鍛練に倣へ／名家書翰蒐集の思ひ出／良寛禪師の手紙に就いて／長崎と市河寛斎翁／越後に於ける亀田齋翁の逸事／松浦北海に就いて／銅雲泉の事／贋物ののがたり／大賀博士の蓮の研究／石割松太郎氏の祥瑞研究／軍国の讀書シーズン／言行録を読んで／東京日日新聞の一万号に際して／丸善の「書鐘」／吉田東伍博士地名辞書編纂の思ひ出／越佐人名辞書／坪内逍遙の刊行に際して／大久保湖南詩集に序す／新潟の公園に長井雲球の碑を見て／文墨余瀆／国書刊行会の思出／紅霞山房印話／印話採余（昭和14年、富山房）

回顧録

幼時見た前原と奥平／忘れられた一人物名和緩氏／獄窓田

語り部・市島春城を憶う

早稲田大学総長 奥島 孝康

市島春城先生が真に「文人」の名に相応しい方であることは、知る人ぞ知るところであろう。 早稲田大学の一教員として、かねてその高名を聞いてはいたものの、先生の文章を読む機会を持つようになったのは、図書館長に就任してからのことである。そして、先生の図書館人としての偉大さを知ることによって、私は、計画中の新中央図書館で先生を顕彰する工夫をしておきたいと強く願うようになり、紆余曲折はあったが、なんと「市島春城記念室」を設けることができた。

図書館界の功労者

早稲田大学図書館長 岡澤 憲芙

日本の図書館に関わるひとびと、また早稲田大学に関係するひとびとにとって、市島春城という名前は特別な響きを持っている。それは単に早稲田大学の初代図書館長であったということによるのではなく、学苑経営の場で、また日本文庫協会（今日の日本図書館協会の会長としての立場で、先生が果たした役割の大きさによるものであろう。しかし残念なことに、今日その業績が広く公にされる機会は少ない。

春城談叢

時局雜感 近衛公と新体制／維新の革新運動を顧みて／七十年前の吏道の一斑／新体制の今昔／統制困難の一例／日露の役を顧みて／序戦の大捷に陶酔する莫れ／興亜の大業／大量趣味／日本は至幸の国／八十歳を迎へて 芸苑叢話 維新の変革期を顧みて国画の消息を語る／竹田と山陽の交情／原杏所／本居宣長／葛飾北斎家居の図／画家小川月銭／原久一郎氏の大同ルストイ全集完成／南方常楠氏／墨場一家言／詩歌の新体制／名家私印の蒐集に就て／醉印人／寧ろ濫読を勧む／朗読と話術／セメント芸術 自然界雜話 富士山／黒部の溪谷／本紳漫言／馬懐往蹟談 帝國議會開設当時の政情／我國最初の臨時議會の思ひ出／大隈老侯の国民葬／早稲田大学の生れた頃／大震災の思ひ出／広い避難所が欲しい／演説思ひ出譚／結婚叢談／死線徂徠／箱根の荷物／地方の家庭美（附失業対策）／講中／盆おどり／村居の炉辺 書齋の掃き寄せ 西園寺公の葬儀と国民葬／松平頼朝翁／中村敬宇翁／大隈侯と操觚界／矢野龍溪／石黒子爵／臥虎山の故侯爵／小栗上野の事／田中正造／鈴木牧之翁に就て／山田眞南を憶ふ／同獄の友人を喪ふ／野口英世博士改名の由来／佐藤功一博士／伊原青々園／河村瑞軒と越後／吾郷の大数学家／淡窓と旭莊／誇大妄想狂と思はれたヒツトラ／ヘルン／キチナー元帥と陶器／積尊の風貌／復讐と宗教／三浦鳩村集中の三話／黄金／黄土／木綿／獄中の綿と木綿／石油の思ひ出／軍艦の紛失／雷／水塊／瓢／枕に就て／酒意／日々是好日／婦人は一家の礎／孤獨／灯台守／明治天皇の御製／初めをつしめ／養生の要訣／古歌を稽りて自ら嘲／曙覧の歌／野村望東尼の和歌／幼児を詠める和歌／坪内逍遙博士の和歌／尾崎紅葉佐渡の句／味ふべき警語／かもと／嘲罵の稱／城／太陽の監視／氣宇の大を欲す／陣中の佳辭／田植唄／靖国神社の拡張／産児奨励／汽車中の國際醜／愛馬デーの回旧談／力づくの品定め／小説の挿画／大骨董／至言抄／温浴雜談／歩け／／スパイの今昔／説客ヘス虎穴に入る／探偵趣味（昭和17年、千歳書房）

推薦の言葉

今回、先生が晩年に刊行された随筆集が復刻されることとなったのは、その意味で実に意義深い。

市島先生の時代、近代日本の図書館はまさに草創期にあった。図書館とはいかにあるべきか、その理想像を摸索する日々であったと思う。そんな中で図書館長に就任された先生は、「深蔵如虚」という信念のもと、積極的な収書活動とその公開に努められ、また文庫協会会長などの立場を通じて図書館界全体の発展にも大きく寄与されたのである。

今日、多様化する情報の渦の中で図書館も新たな時代を迎えている。ともすれば多すぎる情報に押し流されてしまいがちだが、それを整理し、利用者のニーズに的確に答えるためにはどうしたらよいか、草創期同様、しっかりとした指針が必要な時である。先生の随筆集が多くの図書館（員）にとって、「温故知新」のきっかけとなることを望む。

市島春城隨筆集 全11卷

- 第1卷 隨筆頼山陽
- 第2卷 小精廬雜筆
- 第3卷 春城代醉錄
- 第4卷 隨筆早稲田
- 第5卷 文墨余談、漫談明治初年
- 第6卷 文人墨客を語る
- 第7卷 擁炉漫筆
- 第8卷 春城閑話
- 第9卷 鯨肝録
- 第10卷 余生兎戯
- 第11卷 回顧録、春城談叢

●造本・体裁

B6判・上製函入・本文クリーム中性紙、最終巻に解説、著作目録、作品索引を付す。

●刊行予定、定価

一九九六年五月末日刊行

揃定価一〇五、〇六〇円(本体一〇二、〇〇〇円)

ISBN4-87733-015-1 C3395



◆国文学関係書籍の御案内

芭蕉研究資料集成

全20巻 久富哲雄監修・解題
俳諧の世界のみならず、日本文学全体に多大な影響をおよぼした芭蕉の没後三百年を記念して、人物・作品の価値ある研究書を集成。

明治篇全9巻
揃定価一〇九、一八〇円(本体一〇六、〇〇〇円)
大正篇全11巻
揃定価一五四、五〇〇円(本体一五〇、〇〇〇円)
昭和前期篇全19巻
揃定価二八三、二五〇円(本体二七五、〇〇〇円)

蕪村研究資料集成

全17巻 久富哲雄・谷地快一監修・解題
日本・中国を問わず、古典に親しみ、俳諧に絵画に、自在なる境地を志向した蕪村の明治・大正期に刊行された基礎的研究資料を集成。

揃定価一九一、五八〇円(本体一八六、〇〇〇円)

西鶴研究資料集成

全8巻 竹野静雄監修・解題
江戸時代の浮世草子作者・俳諧師井原西鶴の没後三百年を記念して、明治大正、昭和初期に発表された資料約四七〇点を纏めて刊行。

揃定価一二九、七八〇円(本体一二六、〇〇〇円)

近世文芸研究叢書

第一期文学篇全23巻 近世文芸研究叢書刊行会編
近世文芸に関する明治大正に刊行された名著稀書を復刊。

1、通史 全7巻 揃定価八二、四〇〇円
2、一般 全7巻 揃定価九八、八八〇円
3、作家 全9巻 揃定価一一八、四五〇円
揃定価二九九、七三〇円(本体二九一、〇〇〇円)

俚言集覽 自筆稿本版

全11巻 太田全斎編 ことわざ研究会監修・解題
江戸時代の代表的な三大国語辞書の一つ『俚言集覽』の唯一の稿本を『移山伊呂波集』とともに復刻。活字本にはない書き込み等も多く、研究者に新たな資料を供与する。

揃定価一五四、五〇〇円(本体一五〇、〇〇〇円)

徳川三百年人物大鑑

全5巻 長田偶得編
徳川三百年間に於ける思想界に勢力のあつた碩学鴻儒、文学者美術工芸家名僧、義人烈士等七二名の伝記集。年譜・肖像画付。

揃定価七八、二八〇円(本体七六、〇〇〇円)

日本鹿子

磯貝舟也著 久富哲雄解題
元禄四年三月刊行の、全国的な道・国別の地誌十五巻を復刻。城・陣屋・神社・仏閣・名所・名物等を詳細に記述する、江戸文化研究者必携の書。

定価一八、五四〇円(本体一八、〇〇〇円)

影印仮名錦繡段・三體詩・古文真寶

久富哲雄編・解題
江戸期に刊行された貴重な振仮名つき漢詩文集を復刻、『錦繡段』『三體詩』は、天和版と元禄版の二種類を収録。近世の文学作品読解の参考となる文献集。定価一〇、三〇〇円(本体一〇、〇〇〇円)

〒103 東京都中央区日本橋小伝馬町14-15 メロリーナ日本橋
☎03(3888)1821 FAX03(3888)1822

株式会社 クレス出版